

## 論文

# 性に関する親子間コミュニケーションのあり方の検討

## -男子を持つ母親の語りの検討-

梅崎みどり<sup>1)</sup>, 富岡美佳<sup>1)</sup>

キーワード: 思春期, 親子間コミュニケーション, 性教育

要旨: 本研究の目的は, 中学3年生から大学4年生までの男子を持つ母親が, 恋愛に関する話題を子どもから伝えられた時に, 母親が抱く気持ちのあり様を明らかにすることである。研究対象は, 中学3年生から大学4年生までの男子がいる母親10人であった。データ収集方法は, 半構成的インタビューとし, 質的帰納的に分析を行った。その結果, 子どもの成長に伴い交際を知った時の母親の気持ちは中学生・高校生・大学生の時期により変化をしていた。家庭における性に関する親子間のコミュニケーションでは, 中学生では, 子どもの成長過程を理解したうえで, 男女交際でのエチケットやお互いを思いやることの大切さ, 高校生では, 性の自己決定ができるアドバイス, さらに, 大学生では, 社会人としての自覚が育まれるような発達段階に応じた親子間コミュニケーションを行うことが重要であることが示唆された。

### I. はじめに

近年, 我が国における思春期の子どもたちの性行動は低年齢化の傾向を示し, それに伴う人工妊娠中絶, 性感染症の増加が問題となっている。1955年から2007年までの人工妊娠中絶実施率の年次推移によれば, 20歳未満だけで増加しており<sup>1)</sup>, 「健やか親子21」の中間評価<sup>2)</sup> (2006)では, 10代の性感染症罹患率は増加傾向にあると報告されている。こうした背景には, 正しい知識をもたない状況での性行動が関連しているものと考えられる。また, 思春期の子ども性の問題には, 家庭での親子間のコミュニケーションが関係していることが報告されている<sup>3)</sup>が, 親子間では性に関する話題は避けてしまいがちなテーマである。家庭での性教育に関する研究で親を対象としたものは少なく, 思春期の子どもとの異性との交際に関する親の受け止め方や, コミュニケーションのあり方は明確にされていない。

そこで本研究では, 中学3年生から大学4年生までの男子が, 恋愛に関する話題を母親に伝えた時に, 母親が抱く気持ちのあり様を明らかにし, 家庭における性に関する親子間コミュニケーションのあり方を検討することを目的とした。

---

<sup>1)</sup> 山陽学園大学看護学部看護学科

## II. 研究方法

### 1. 研究参加者

研究参加者は、A 市内の中学 3 年生から大学 4 年生までの男子がいる母親 10 人を対象とした。参加者の内訳は、中学 3 年生をもつ母親 4 人、高校 2 年生をもつ母親 4 人、大学生をもつ母親 2 人である。

### 2. データ収集期間

調査期間は 2010 年 8 月から 9 月であった。

### 3. インタビュー内容

研究目的に沿って研究者が作成したインタビューガイドに基づいて半構成的面接を行い、参加者から自由な語りを得た。

### 4. データ収集方法

中学 3 年生から大学 4 年生までの男子がいる母親 10 名に研究者が調査の主旨を説明し、同意が得られた参加者に対し、希望の場所で 1 回 20 分程度の半構成的インタビューを行った。なお、参加者の了解を得て、IC レコーダーとメモによるインタビュー内容の保存を行った。

### 5. データの分析方法

録音したテープとメモをもとに逐語録を作成し、それをデータとして質的帰納的分析を行った。分析の手順として、IC レコーダーに録音したインタビューデータの内容を読み込み、文脈ごとに区切り、カテゴリーを抽出した。

### 6. 分析結果の妥当性の検討

データ分析過程では、質的研究の専門家によるスーパーバイズを受け、カテゴリーの妥当性を高めた。

### 7. 倫理的配慮

研究参加者には、調査の趣旨を説明して承諾を得、調査に同意した後でもいつでも調査協力の撤回ができることを保証した。また、調査後の個人データは、全て匿名化し、本研究以外に使用しないことを説明した。

## III. 結果

### 1. 研究参加者の背景(表 1)

表 1 研究参加者属性

	子どもの学年
A	中学3年
B	中学3年
C	中学3年
D	中学3年
E	高校2年
F	高校2年
G	高校2年
H	高校2年
I	大学2年
J	大学4年

## 2. 研究参加者の特徴

10 人の参加者が語った、恋愛に関する話題を子どもから知らされた時の心理的变化は、『子どもへの信頼』を中核カテゴリーとする 13 のカテゴリーと 32 のサブカテゴリーで構成された(表 2)。特に中学生では、性的な行為を懸念した母親の『戦略』と『決意』という経験世界が表出されていた。以下、導きだされた各カテゴリーとそれを構成するサブカテゴリーについて述べる。文中では、抽出されたカテゴリーを【 】、サブカテゴリーを《 》で示し、語りの一部を「 」斜体で表した。また、参加者は A~J の仮名を用いた。

## 3. 中学 3 年生の息子の母親

中学 3 年生の母親は、予期せぬ息子の交際相手の訪問を【予想外なことへの戸惑い】として受けとめ、受験勉強に集中して欲しいという気持ちから【よりによって受験期にという苛立ち】を体験していた。また、中学生が異性と交際することに対して【“変なこと”になるのではという焦り】を感じ、思っていることをストレートに伝えられない【舵取りできないもどかしさ】や【私から離れていく寂しさ】を表現していた。そして、息子を【信じる努力】が語られた。

## 1) 予想外なことへの戸惑い

中学 3 年生の母親は「突然、彼女が来たよ。もうびっくり(A)」と、予期せぬ息子の交際相手の出現に動揺し、《突然の訪問への驚き》を感じたと語っていた。また、家族が共有するパソコンで息子と交際相手がメールのやり取りをしていたために、その内容を偶然知ることになったことについて《あからさまにされることの不快感》を語っていた。

## 2) よりによって受験期にという苛立ち

高校受験を控えた息子をもつ母親は、中学 3 年生になったら、何よりもまず学業を優先して欲しいと願っていた。しかし、息子は好意を寄せる異性ととの交際をスタートさせたために、受験期の親の気持ちを見捨てられたと感じ、「受験期になって彼女ができた。どうして今なのって思う。こっちは受験でピリピリしているのに(A)」という、《緊迫を逆撫でされる怒り》を感じたことを語った。そして、異性ととの交際によって学業に専念できなくなり、息子の気持ちが《浮かれることへの懸念》を抱いていた。また、とにかく受験が無事に終わって欲しいと願い、《ひとまず受験》という心理状態であったと語った。

## 3) “変なこと”になるのではという焦り

突然、息子の部屋に交際相手が遊びに来たことで、俄かに母親は無知な状況での行動を危惧し始め、「まだ、中学生よ(B)」と、《時期早尚》という判断をしていた。そして、息子が《女の子を傷付けることへの不安》を感じていた。そして、「彼女が遊びに来た時は、わざと大きな足音をさせながら階段を上がるようにする(D)」という、《親密さの中断》という具体的な行動をとっていた。また、息子と交際相手が 2 人きりで過ごしている状況に気を揉み、状況の把握と 2 人だけの空間に風穴を明けるための戦略として、「弟(5 歳)に偵察に行かせて、お兄ちゃんとお姉ちゃんはどうだったって聞いたよ(A)」という、《歯止めの偵察》を行っていた。さらに、息子の部屋のドアは開けたままにしておくという、《頑とした密室の回避》を実行していた。そして、これだけは伝えなければならないと決意し、「“変なこと”をしたらダメだよって、これだけは言う(B)」という《けじめの表明》をしていた。

## 4) 舵取りできないもどかしさ

参加者たちは、自らの人生経験を踏まえ、高校受験が息子の人生において将来の方向性を決定する重要な通過点であり、息子の望む方向に進路選択ができるように、今は持てる力の全てを

勉強に充てて欲しいと感じ、異性との交際ではなく、勉強に集中して欲しいと願っていた。しかし、実際には「あまり付き合うことにあれこれ言ったら、付き合うことを隠すようになるかも。それも困る…(B)」と、《忠告へのためらい》を感じていた。

#### 5) 私から離れていく寂しさ

思春期は身体的な著しい成長と共に心理的にも自立を遂げるまでの過渡期であるため、これまで築いてきた母親との関係にも変化が生じるようになる。「それは嫌よ。これまでは私の言うことを聞いていたのに…(B)」と、息子の心に自分以外の女性の存在が大きくなりつつあることに対し、【私から離れていく寂しさ】を体験していた。

#### 6) 信じる努力

息子の恋愛に、戸惑い、苛立ち、焦り、もどかしさ、寂しさといった様々な感情を体験している参加者たちであったが、同時に息子の心に近づこうとする心の動きが多く語られた。「彼女ができてもしかたないかな(A)」と《容認への歩み寄り》を示し、息子のこれまでの成長過程を知る《母親だからわかる息子》に対して【信じる努力】が表現されていた。

### 4. 高校2年生の息子の母親

高校2年生の母親は、母親の勘で【息子の交際を予感】し、息子が成長する姿に《重なる自分の青春の時》を感じていた。そして、息子の交際を【人並みの成長への喜び】と表現していた。しかし、同時に息子の成長に【追いつかない心の整理】を体験していた。そして、異性との交際を容認し、息子の成長した姿に【我が子を信じたいという思い】を感じていた。

#### 1) 息子の交際を予感

「彼女ができたと本人は言わないけど、彼女はいると思う(H)」と、息子の雰囲気や態度の変化、表情の違いなどから《母親の勘》を働かせていた。しかし、息子との関係性が変化することをためらい、息子に恋愛について《面と向かって聞けない遣る瀬無さ》を体験していた。参加者の中には、息子の過去の行動から《彼女の存在への慣れ》を自覚しているものもあった。そして、高校2年生の恋愛には《受験生としての自覚が前提》であることが示された。

#### 2) 人並みの成長への喜び

「嬉しい。人並みに青春を楽しんでくれると思うと嬉しい(E)」という、《青春謳歌への喜び》を語り、息子が成長する姿に《重なる自分の青春の時》を自覚していた。

#### 3) 追いつかない心の整理

息子の交際相手の存在に《息子の彼女への嫉妬》や、「今まで私の言うことだけ聞いていたあの子が、ほかの女の人の言うことを聞くようになると思うと寂しい。正直ちょっと複雑よ(F)」という、《私以外の女性の出現》に対するもどかしさや、息子の成長に母親が【追いつかない心の整理】の状態であることを語った。

#### 4) 我が子を信じたいという思い

思春期には親に知られたくない部分が膨らみ、親との間に距離を置く気持ちと、自分自身への関心が高まる。しかし、幼少期からの親子の関係性によっては、「うちの息子、彼女ができたとか結構オープンにしゃべるよ(G)」と、抵抗を感じることなく母親に交際相手のことを打ち明けるケースもある。そして、「ある程度任そうと思う(E)」という語りのように、【我が子の行動を信じたいという思い】が語られていた。

### 5. 大学生の息子の母親

大学生の母親は、結婚を意識する気持ちから息子の恋愛を【一般的であるという安心】として受

け止めていた。同時に、社会的に順番を守って欲しいとする思いから【婚前妊娠へのこだわり】を強くしていた。そして、成長した息子からの言葉に【子どもへの信頼、「間違いがなかった育て」への自負】を体験していた。

1) 一般的であるという安心

「うちの息子はもう 22 歳だから(J)」の語りのように、《恋愛適齢期への到達》について自覚し、息子が年齢相応の成長を遂げていることについて《普通であることへの安堵》を感じていた。

2) 婚前妊娠へのこだわり

経済的な問題や結婚に伴う責任の重さなどから、《結婚という高いハードル》があることを自覚していた。そして、結婚をしてから子どもを授かるという《順番は守って欲しいという願い》を語っていた。

3) 子どもへの信頼、「間違いがなかった子育て」への自負

「本人が『俺、結婚前に彼女が妊娠することがないように気をつけている』って。息子と自然にそういう話ができるようにならないといけない(L)」と、息子を信頼し、自らの【間違いがなかった子育て】への自負を感じていた。

表2 男子をもつ母親の性に関する親子間コミュニケーションを構成するカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー
予想外なことへの戸惑い	突然の訪問への驚き
	あからさまにされることへの不快感
よりによって受験期にという苛立ち	緊迫を逆撫でされる怒り
	浮かれることへの懸念
	ひとまず受験
“変なこと”になるのではという焦り	時期早尚
	親密さの中断
	女の子を傷付けることへの不安
	歯止めの偵察
	頑とした密室の回避
舵取りできないもどかしさ	けじめの表明
私から離れていく寂しさ	忠告へのためらい
信じる努力	私だけのものから離れる不安
	容認への歩み寄り
息子の交際を予感	母親だからわかる息子
	母親の勤
	面と向かって聞けない遠る瀬無さ
	彼女の存在への慣れ
人並みの成長への喜び	受験生としての自覚が前提
	青春謳歌への喜び
	重なる自分の青春の時
追いつかない心の整理	息子の彼女への嫉妬
	私以外の女性の出現
	正直ちょっと複雑
我が子を信じたいという思い	開かれた息子との関係
一般的であるという安心	恋愛適齢期への到達
	普通であることへの安堵
婚前妊娠へのこだわり	結婚という高いハードル
	順番は守って欲しいという願い
	我が子の行為への覚悟
	「婚前妊娠はやめて」に反発する子どもへの怒り
子どもへの信頼、「間違いがなかった子育て」への自負	自然体で話せることの喜び



#### IV. 考察

##### 1. 性に関する親子間コミュニケーション

思春期とは、およそ中学生から高校卒業前後までの 10 代の頃を指し、身体的な変化とともに心理的にも非常に混乱する時期である。この時期には親との関係で生じる様々な葛藤を調節しながら心理的な自立を調整することが課題となる<sup>5)</sup>。斎藤<sup>6)</sup>は、中学生の親を対象とした性に関する子どもとの会話に関する研究で、日常会話は親子ですが、性を恥ずかしい事とらえている親が多いため親子間での性に関する会話は少ないことを示している。本研究においても、親子間での恋愛に関する会話は日常的にはされていなかったことから、息子の交際相手の訪問を《突然の訪問への驚き》と受け止め、無知な状況での行動を危惧する気持ちを抱き、《女の子を傷付けることへの不安》へと変化したことが明らかとなった。中学生にとって親子間のコミュニケーションは重要であり、日本家族計画協会<sup>3)</sup>が行った調査によれば、親子で会話することが性交の開始年齢を遅らせることにつながると報告している。このように中学生の性に関する親子間コミュニケーションでは、性をタブー視せずに語ることの重要性が明らかとなった。そして、具体的な知識やリスクのみならず、男女交際でのエチケットやお互いを思いやることの大切さなどを日常の会話のなかで伝えることの必要性が示唆された。

高校生の場合では、木原<sup>7)</sup>は、わが国の若者の性行動は、若年化、性交渉相手の多数化、性交渉相手の多様化など大きく変貌しており、背景となる性容認率や性経験率の高さは家族との会話の乏しさや親の無理解感などと強く関連することを報告している。本結果からは、《母親の勘》により、息子の交際を予感するが、息子に異性との交際について《面と向かって聞けない遣る瀬無さ》があることが語られた。そして、母親は、息子が 17～18 歳という第二性徴による身体的な変化だけでなく、心理的にも性役割を獲得することが重要な時期であることを認識し、息子の恋愛を【人並みの成長への喜び】として受け止め、自らの青春の時を重ね合わせることで息子に共感し、交際を容認することが明らかとなった。斎藤ら<sup>8)</sup>は、高校生の性意識と性行動に関する研究で、高校生が性に対して自分の意見を明確にもち、性の自己決定について教育を行うことが重要であると述べている。このように、高校生の親子間コミュニケーションでは、性行動が活発化する社会的な環境にあっても、自らのライフサイクルの全体像をイメージし、自己の性行動について自己決定ができるアドバイスを行うことが重要と考えられた。

青年期にある大学生の場合では、本結果からは、母親は、大学生になった息子には就職、結婚などを視野に入れた将来の生き方について意思決定することが重要であると認識しており、《恋愛適齢期への到達》を自覚し、息子が年齢相応の成長を遂げていることについて《普通であることへの安堵》を感じていた。そして、「本人が『俺、結婚前に彼女が妊娠することがないように気をつけている』って。(L)」と、成長した息子に信頼を寄せ、信頼関係を基盤としたコミュニケーションが行われたことが明らかとなった。このように、無藤ら<sup>10)</sup>がいうように、異性との親密な関係を構築し将来の伴侶の獲得がめざされる性的に重要な時期にある大学生には、社会人としての自覚が育まれるようなコミュニケーションを行う必要があると考えられた。

##### 2. 恋愛に関する話題を経験する母親の心理的プロセス

落合<sup>5)</sup>は、中学生の親子関係の特徴を、親が危険から守る親として子どもに接することであると述べている。これは、子どもが大人に近づくことで生じる幼少の頃とは異なる危険から子どもを守ろうとすることである。本結果からは、中学 3 年生の母親が交際相手の訪問を【予想外なことへの戸惑い】として受け止め、中学生の恋愛を《時期早尚》と判断した。そして、《女の子を傷付けるこ

とへの不安》を感じ、瞬時に《親密さの中断》や《歯止めの偵察》という『戦略』と「変なこと」をしたらダメだよって、これだけは言う(B)」という《けじめの表明》を行っていたことが明らかとなった。このように、母親は中学生の恋愛を子どもへの危険としてとらえ、危険を回避する反応を示したと考えられる。しかし、いつまでも、親が子どもを自分の管理のもとにおいておこうすることは子どもの自立を妨げるため、第二次性徴が発現する以前から親子で性に関するコミュニケーションをはかり、子どもの成長を予測しながら見守ることのできる関係づくりが重要であると示唆された。

高校生の母親の場合には、本結果からは、【息子の交際を予感】し、恋愛を容認するまでに、【人並みの成長への喜び】と【追いつかない心の整理】というアンビバレンスなプロセスがあることが明らかとなった。岡本ら<sup>9)</sup>によれば、中年女性の葛藤は、子どもの親離れに伴うものが多いことが示されているが、本調査の参加者も「今まで私の言うことだけ聞いていたあの子が、ほかの女の人の言うことを聞くようになって思うと寂しい。(F)」という、《私以外の女性の出現》に対するもどかしさや寂しさを表現していた。このように、子どもの成長に伴い、親子関係は変化することを心に留め、母親自身の成長や発達についての長期的な展望をもち、職業や学習、社会的な活動など何か打ちこめるものへの積極的な関与を準備し始めることが必要であると考えられた。

大学生の母親の場合には、本結果からは、「本人が『俺、結婚前に彼女が妊娠することがないように気をつけている』って。息子と自然にそういう話ができるようにならないといけない(L)」という、息子の言葉から自らの子育てについて肯定的な評価をしていることが明らかとなった。尾形<sup>10)</sup>は青年期の子どもは、親からの心理的自立という発達課題があり、子どもの心理的自立にともなって親側も自身の子育ての結果として現状に対峙することが求められると述べている。このように、母親は、青年期に達した子どもの姿から自分自身の子育てについての評価や自分自身への評価を行うことが明らかとなった。

### 3. 『子どもへの信頼』を中核とする親子間コミュニケーション

中学生の場合には、本結果からは、息子の恋愛に関する話題についての戸惑い、苛立ち、焦り、もどかしさ、寂しさといった様々な感情の後に「彼女ができてもしかたないかな(A)」と交際《容認への歩み寄り》を示し、息子のこれまでの成長を知る《母親だからわかる息子》に【信じる努力】をしていることが明らかとなった。子どもは自立の過程において、母親に見守られることや心の支えていてくれることを望むことから、母親が息子に【信じる努力】をすることは、子どもの発達段階に応じた自立を促し、自己実現に向かう意欲を引き出すことにつながると考えられた。

高校生になると親子の関係は互いに関わりにくく難しい時期に入る。2004年に実施された全国高校生調査<sup>12)</sup>によれば、高校3年生の性交経験率は、男子30%、女子39%であり、都会と地方に差はないことが示されている。本結果では、彼女との交際を容認した母親は、息子の常識ある判断を期待し、【我が子の行動を信じたいという思い】でいることが明らかとなった。

大学生の場合には、本結果からは、息子の恋愛を【一般的であるという安心】と受け止めながらも、母親の価値観から【婚前妊娠へのこだわり】が表出されていた。そして、成長した息子の言葉から【子どもへの信頼、「間違いがなかった子育て」への自負】を体験したことが明らかとなった。子どもの自立により親子の関係は上下の関係から、自然に向き合える対等な関係へと変化する。大学生の母親は子どもへの信頼を確実なものにすることで、同じ大人としての新たな関係を築いていくことが考えられた。

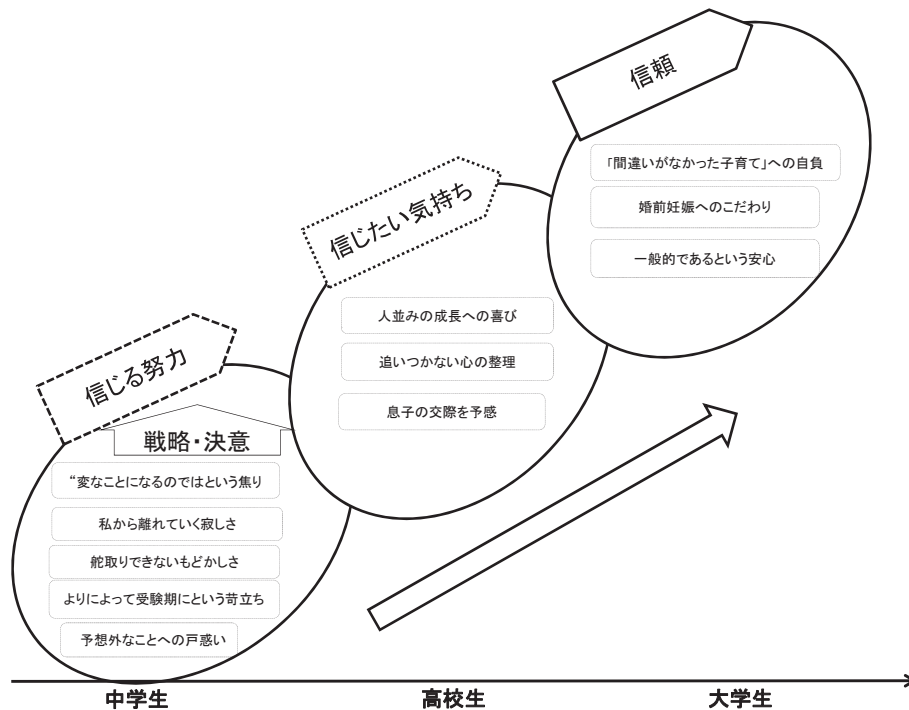


図1 性に関する親子間コミュニケーション「子どもへの信頼」概念図

## V. 本研究の限界と課題

研究参加者が A 市内に居住する中学 3 年生から大学 4 年生までの男子がいる母親 10 名と限られており、親子間コミュニケーションのあり方を網羅するには限界がある。

今後の研究課題として、継続的な研究により中学生、高校生、大学生の子どもがいる母親の恋愛の話題に関する受け止め方や学年間での違い、子どもが女子の場合などについて明らかにし、親子間コミュニケーションのあり方を検討する必要がある。

## VI. 結語

1. 中学生、高校生、大学生との性に関する親子間のコミュニケーションは、『子どもへの信頼』を中核カテゴリーとする 13 のカテゴリーと 32 のサブカテゴリーで構成されていた。
2. 性に関する親子間コミュニケーションは、中学生では、子どもの成長過程を理解したうえで、男女交際でのエチケットやお互いを思いやることの大切さ、高校生では、性の自己決定ができるアドバイス、さらに、大学生では、社会人としての自覚が育まれるような発達段階に応じた親子間コミュニケーションを行うことが重要である。
3. 子どもの成長に伴い、恋愛に関する話題を経験する母親の心理的プロセスには、「信じる努力」「信じたい気持ち」「信頼」があり、中学生においては『戦略』と『決意』という特徴的な表明があった。



引用文献

- 1) 独立行政法人国立女性教育会館(2009). 男女共同参画統計データブック, ぎょうせい.137-138
- 2) 「健やか親子 21」中間評価報告.
- 3) 日本家族計画協会(2003).男女の生活と意識に関する調査結果の概要 性に関する知識・意識・行動について, 社団法人日本家族計画協会.
- 4) 粕井みづほ, 青野明子(2008). 発達と家族の心理学, KOMI.
- 5) 落合良行(1998). 中学3年生の心理, 大日本図書
- 6) 斎藤益子, 木村良秀, 宍戸章予(2005). 中学生をもつ親の二次性徴発現時の子どもへのかかわりおよび性に関する子どもとの会話に関する検討, 思春期学, 23(1), 154-158.
- 7) 木原雅子(2009). 現代社会の若者の性行動, 母子保健情報, 60, 59-62.
- 8) 斎藤益子, 木村良秀(1999). 高校生の性意識と性行動に関する実態, 思春期学, 17(2), 263-271.
- 9) 岡本祐子, 松下美知子(1998). 女性のためのライフサイクル心理学, 福村出版.
- 10) 無藤隆, 麻生武, 内田伸子ら(1995). 自己への問い直し 青年期, 金子書房.
- 11) 尾形和男(2006). 家族のかかわりから考える生涯発達心理学, 北大路書房.
- 12) 木原雅子ほか(2008). 若者に見られる性行動とSTD 田中正利(編) 性感染症STD改訂2版, 南山堂, 87-98.